

生きる



京都市左京区在住の田中^{ひろき}愷毅さんは、ALS^{きんしょうせいのうくわくこうかしょう}（筋萎縮性側索硬化症）と呼ばれる難病で、発症から十数年、在宅人工呼吸療法が必要となつて7年になる。現在、動かすことのできるのは、眉、目などごく一部で、そこにパソコンにつながるスイッチが設定されている。



田中さんは三代つづいた図案家で、入院している時も一番の要求は「自宅に帰って、仕事がしたい」だった。元気なときは全く興味のなかったパソコンを今、一番の武器にしている。



在宅療養を支えるのは京都市民医連第二中央病院を中心とする医療と介護のネットワーク。作業療法士、看護師、ヘルパーが、ほぼ毎日のように入れ替わりながらサポートする。



愼毅さんがデザインしたものを、息子の晶さんが形にし、奥さんの京子さんが帆布&デニム靴店「たなかほろぎょう田中豊享」を開く。介護、家事、店と大忙しの京子さんの笑顔に、この夫婦の前向きに生きる力を見たような気がした。詳しくはもんゆうすけ門祐輔編『田中飛鳥井町のちのカルテ』（かもがわ出版）。（写真・豆塚 猛）

【ひろばトーク】

ちょっとお節介で活発な隣人をめざして 中村江里加 6

●特集● キラリと光る福祉実践

つながれ子育て仲間！ ひろがれ子育ての輪	植木加奈子	9
実践っておもしろい	菅野妃佐子	14
離島MSW奮闘記	川村 友美	20
実践への気づきと確信～私たちの社会福祉実践～	横山 秀昭	26
実践記録から学ぶ	大野 勇夫	32

●トピックス●

地域生活支援における社会福祉士と弁護士の連携	繁澤 多美	34
障害者自立支援法訴訟の終結へ	家平 悟	38
切り詰められる食生活（1）		
コンビニ弁当から考える		40
第16回社会福祉研究交流集会 in 東京へのお誘い	杉村 宏	42

●連載●

フォーラム 反核・平和の人生をふり返って	上坪 陽	48
三島の郷だより 明日につながれ		
三島の郷の通所事業「たけのこ」	西垣 祥子	50
相談室の窓から		
外の世界に開く窓・つながるパイプ	青木 道忠	52
社会科学の窓から見える 社会福祉ひろば	鍋谷 州春	54
“母子と貧困”		
わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」		
私の地域医療（その11）	早川 一光	56
よりあって おりあって——宅老所よりあい物語——		
ばばちゃん 蘇る	下村恵美子	58
育つ風景 家族旅行	清水 玲子	60
落合健二のニュース私考		
人気回復の決め手は「公開」「開放」だ	落合 健二	62
映画案内 『ぐるりのこと。』	吉村 英夫	64
現代の貧困を訪ねて		
公設派遣村と南港臨時宿泊所	生田 武志	66
海外社会保障事情		
カナダでのボランティア活動を通して	田中 貴子	68
私の研究ノート		
保育所実践の構造と専門性について	小堀智恵子	70
ホームレスから日本を見れば		
「New ニュー日雇い」のススメ	ありむら潜	72
花咲け！男やもめ	川口モトコ	74
バリアフリーな社会をめざして		
「中崎クィアハウス」の共同生活	住人一同	75

今月の本棚 45／みんなのポスト 46／ことばで遊ぼう！ 73／
福祉の動き 76

●グラビア● 生きる

福祉のひろば

2010年3月号

●表紙の作品●

神門やすこ



●カット●

川本 浩・田上明子

ちょっとお節介で活発な 隣人をめざして

「北海道の労働と福祉を考える会」ボランティア

中村江里加さん（北海道大学法学部法律課程3年）

私たち「北海道の労働と福祉を考える会」（労働会と呼んでいます）は、ホームレス状態の人々の自立支援を目的として、札幌市中心部を拠点に、北海道大学や北星学園大学、札幌学院大学の学生が主体となって一般市民と共に活動しているボランティア団体です。

自立支援という目的を念頭に、夜回り、炊き出し、人数調査、生活保護申請や病院診察への同伴、学習会などを行っています。北海道には公式には九九人のホームレスの人がいます（二〇〇九年一月調査）。北海道の厳冬の早朝の調査では、ホームレスの人を見つけるのはかなり困難で、実際にはもっと多くの人がいると考えています。

活動の柱である夜回りでは、毎月第一・三土曜日に札幌市中心部を歩いて回りながらホームレスの人たちに声をかけています。また、炊き出しは、二か月に一回程度の頻度で行っており、食事や衣類の提供、生活雑貨の提供、散髪、法律相談、就労相談、生活相談が主な内容です。

私が活動を始める以前から、札幌では支援活動の積み重ねがありました。しかし、それでも新しくホームレス状態になる人は絶えず、一方で長い間ホームレス生活から抜けられない人が多くいます。私たちの活動は当分続きそうです。

私は活動にかかわればかわるほど、自立支援の難しさを実感しています。そして二つの難しさを見つけました。一つは、自立とは本人が力を取り戻すことであって、本人が声をあげて助けを求め、再出発する気持ちを持っていないという難しさです。

二つ目の難しさは、自立が困難なケースほど、社会で自立した生活を送るためには、「人」の助けやかかわりが必要としているということだと思います。自力では生活がどうにもならず、ホームレス状態になってしまったのですから、支援を利用して脱路上したとしても、



なかむら えりか

茨城県出身。2008年8月から「北海道の労働と福祉を考える会」でボランティア活動を始める。2009年度から事務局長。

住居を得てから生活を立て直すまでには多くの人の手助けが必要となってきます。

一方で、自立支援の一つひとつは誰でもできる簡単なものだと私は考えています。誰一人、ホームレス状態になることのない社会にするにはどうすればいいのかと考えると、困っている隣人を見捨てないという地域づくりではないでしょうか。もともと多くの人が自分の住む地域の人々に関心を持って、自分ができることを見つけて活動していくことが大切なのではないかと思っています。

私が労福会のようなボランティアに関心を持つようになった背景には、日本や世界の各地で起こっている社会問題に対して素直に疑問を感じるという気持ちがありました。何か私にできることはないのかと考えたとき、時間や考え方に縛られない学生だからこそできる活動の一つとしてボランティア活動へと自然に動いていました。労福会に関心を持つ学生の多くは、何か考えを持っている人や「何かできないか」と前向きに考えている人です。そして活動を通して、これまで知り得なかった生の事実を知り、新たに考えることがたくさんありました。さまざまな職種の人に出会い、社会資源を利用する場に立ち会うことで、大学の授業や新聞で触れる情報が「受け身」で頭に詰め込む知識ではなく、もともと身近な関心事、使える知識となり、私のほうもそれらを「利用する姿勢」に変わりました。ボランティア活動とは、少しのひらめきや思いやり、そして少しの自由な時間があれば始められるものです。自分の周りを見渡してみても、「あれ？」と気付いたことがあればチャンスだと思えます。ちょっとお節介で活発な隣人となる学生がもっと増えることを期待しています。

※六月号特集で全国の夜廻り実践を取り上げます。四月上旬に大阪で公開シンポを開催する予定です。

特集

キラリと光る福祉実践

居場所がある そのひとらしさがある

丸ごとその人を支え、仲間を大切にする実践と視点
やりたい実践 できない現実のなかでの悔しさの共有と
できる未来へのたたかい

全国津々浦々の福祉現場にはさまざまな生きた実践があります。

月刊誌『福祉のひろば』は、今号で月刊化一〇年を迎えました。

多くの方々に支えられ、励まされ、そして登場していただいて
歩んできた一〇年です。本誌編集の総合社会福祉研究所では、二〇
〇九年一月に『現場がつくる新しい社会福祉』を刊行し、その続編
『現場でつくる新しい社会福祉』発刊に向けて準備を始めています。

今号で登場いただいた報告は、どれもさまざまな福祉現場で、い
ままさに営まれている生きた福祉実践です。総評を本誌編集委員の
大野勇夫さん（日本福祉大学教授）にお願いしました。

これからも『福祉のひろば』では、現場の生きた社会福祉実践を
紹介し、交流を広げていきます。みなさんの参加と支援を今後もお
願いします。

（『福祉のひろば』編集主幹 黒田孝彦）

つながれ子育て仲間！

ひろがれ子育ての輪

うえき
植木

かなこ
加奈子

(あおぞら保育園 保育士)

園の概要

あおぞら保育園は、横浜市の中央、神奈川区にある定員一二〇名の民間保育所です。一九五五年、地域のお母さんたちが集まり、六角橋かくはしプール脱衣場を拠点に、文字通り「あおぞら」の下で共同保育を始めました。

「友だちのなかで全身を使い、思いっきり遊べる子をめざす」

「子育てという重大な仕事を父母・地域との連携をさらに深めながらおすすめる」を保育目標に、地域のニーズにこだわり、保育を追求してきました。

事業内容は、産休明けから就学前までの年齢別保育、完全給食、七時～二〇時までの延長保育、障害児保育、一時保育、二四時間型緊急一時保育、地域の親子が日常保育に参加する「あそぼ！会」と



1歳児育児講座で、あそんだあとは、みんなでちょっと発達の学習



食の育児講座で、実際に小松菜や人参を見ながら食の大切さを学びました

さまざまな地域子育て支援活動を行っています。

厳しさを増す父母の現状

不況が続く社会情勢が厳しいなか、あおぞら保育園の父母の状況も例外ではありません。

・子どもの病気で休みが続き、正規からパートへと降格になり、

結局仕事を辞めざるをえなかった母親。

・入園時、父親の会社が急に倒産して仕事を失ったうえ社宅にも住めなくなり、専業主婦の母親がすぐにでも働かなくてはならなくなつた家庭。

・リストラで退職し、仕事がなくなかみつからずプライドがはずたに傷ついた父親。

・毎日二〇時までの保育や、土曜日保育を利用。子どもとの時間が持てない家庭。

・急な残業、遠方への通勤も多い父母。

・延長料金がかからないよう走つてお迎えにくる母親。

・急な仕事でお迎えが間にあわないと頻繁に連絡してくる父母。

・休みの日も心身共にゆとりがなく、子どもと遊べないと悩む母親。

精神的にも追い込まれ、子育てのなかに貧困や格差がその影を落としていきます。また、子どもとの関わり方、遊び方を知らない、子どもの発達に見通しが持てず、自分の子どもと他の子どもとを比べる父母が増えています。

子どもたちは、大人の生活に影響を受け、夜型になりがちで、散歩中にあくびをしたり、疲れていたり、体調がすっきりしないなどの姿があります。

みんなでつくるあおぞらの保育！

あおぞら保育園は、保育姿勢の